

神戸大学と

Across the Boundaries

神戸大学のメタモルフォーゼを伝えるメディア

No.7

わたし



『神戸大学で学んだのは、
情報知能工学だけではなかった』

「大学と社会の結び目」グローバル人材の時代が始まった
イラン人留学生から芥川賞候補作家へーシリル・ネザマフィさんに聞く
〔神戸大学基金基盤事業〕による国際化推進プログラム「留学支援(幸野七海さん)・KALCS事業助成(大谷一夫さん)
〔ききん・だより〕被災地支援第8次ボランティアバス派遣、ほか

イラン人留学生から芥川賞候補作家へ——神戸大学で学んだのは、情報知能工学だけではなかった。

神戸大学出身の新進作家が純文学の世界に彗星のように現れた。名前はシリン・ネザマフィ。イラン出身の留学生として神戸大学で情報知能工学を学び、現在システムエンジニアとして日本企業で働く。どの方向から切り取ってもユニークなバックグラウンドを持つ彼女は、あくまで日本語で書くことにこだわり、日本語で表現される文学に新しい風を吹き込んでいる。神戸大学が生んだ新時代の国際人作家・シリン・ネザマフィさんに、神戸大学との出会いと作家になつたいきさつを聞いた。

●高校のときから理工系

シリンさんが日本に留学したのは、まったく自然な成り行きだったという。

「イランは歴史的にもシルクロードの要衝だったこともあり、他民族・多文化との交流も盛んで、祖父母や父母の代も留学していたので、高校を出たら海外に留学するものだと当たり前のように思っていました」とシリンさん。イランでは高校の時に医学系、理工系、人文系、芸術系とコースが分かれ、医学系なら生物学が、理工系なら物理や数学が重点教科として設定されている。重点教科の成績が芳しくないと人文系に「落とされる」。自然科学の成績重視のコース設定になっているそうだ。生物学よりも物理・数学の方が好きで理工系の高校を選んだシリンさん。人文系に移るという選択肢は全くなかった。

●日本の技術にあこがれて

当時のイランでは、ソニー、ナショナルといった日本の工業製品のブランドはヨーロッパブランドと比べても圧倒的な力を持っている

た。特にナショナル

の「炊飯器」はイラン市場で初めて開発された「おこげができる炊飯器」として多くの家庭に溶け込んでいた。

テヘランの米は、イラン北部のカスピ海に近い地方で生産されている。粒の丸いタイプと細長いタイプ



●「おこげのご飯」で作った料理(Wikimedia Commonsより)

のどちらもあるが、どちらかといえば細長いタイプが高級とされている。しかも炊き方が日本と全く異なり、「おこげ」が好まれる。炊きあがってほどよく焦げた香ばしいご飯を、釜のまま逆さまにして大皿に取り出すと、ケーキのようにも見える『写真』。これを包丁で切つて取り分け、おかずをかけて食べるのだ。このおこげご飯の自動炊飯器をイランで最初に開発したのが「ナショナル」だったのである。もう30年以上前の話である。

「人文系だったら欧州留学を考えたかもしれないが、理工系だったので、こんなすばらしい工業製品を作る国ってどんなところだろうと日本への憧れに近い気持ちがありました」だから日本へ行つて技術を学ぶという選択が徐々に現実味をおびてきた。

「それに、中学時代に日本から転校してきた女の子と友達になつたことも日本に行きたいと思つたきっかけのひとつ」とシリンさんは日本留学の動機を振り返る。

●神戸大学でのカルチャーショック

シリンさんの日本留学初年度はほぼ理想通りだった。日本語の研修があつた大阪外大(当時)では民族・国籍・母語・年齢が異なる幅広い層の留学生が集まつて日本語を学び、キャンパス内では日本人学生も積極的に留学生と交流した。「夏まつり」で一緒にエスニック料理の模擬店を出したり、音楽サークルで一緒に歌つたり、まさしく留学生と日本人学生が分け隔たらない学生生活を楽しんでた。

神戸大学を選んだのは、希望する専攻があつたことほもちろんだが、神戸の街がとても「住みやすくおしゃれ」だったことと、先輩留学生の間で評判がよかったことが大きな理由だという。

ところが、神戸大学に入学してみても、シリンさんは大きなカルチャーショックに襲われた。工学部の同期生は高校を出たばかりの男子学生ばかり。恥ずかしいからか、関心がな



1979年生。イランの首都テヘラン出身。高校を卒業後、1999年に日本政府の国費留学生として来日。大阪外国語大学での一年間の日本語研修を経て2000年4月神戸大学工学部入学。2006年3月神戸大学大学院自然科学研究科博士前期課程(情報知能専攻)修了。同年4月松下電器産業(現パナソニック)株式会社入社。システムエンジニアとして3年間の国内勤務を経験。2009年より中東ドバイのパナソニック現地法人に駐在。在学中にアフガニスタン難民の通訳をした体験をヒントに日本語で執筆した小説「サラム」が2006年留学生文学賞を受賞。2009年小説「白い紙」で第108回文壇新人賞、第141回芥川賞候補。2010年小説「拍動」で第143回芥川賞候補。現在、ドバイで働く傍ら、作家としても活躍中。最新作は小説「頁の上の蝶々」(文藝界)2011年12月号に掲載。

シリン・ネザマフィ

(Shirin Nezam-Afshar)

とは、言葉を交わすどころか目も合わせてくれなかった。授業で一緒にいる日本人学生とは、その後もほとんど打ち解けることなく、話し相手は留学生寮の仲間だけになってしまった。

「友だちが欲しかったのに、日本人学生の中にはまったく入っていきなくて、とても寂しい思いをしました」と、シリンさんは当時を振り返る。

●瀬口先生との出会い

寂しく苦しい留学生生活を過ごしていたシリンさんが3年生になったある日、大きな転機が訪れた。留学生センターの瀬口郁子教授（現名誉教授）から突然の電話があり、イラン人学生が交通事故に遭い、家族が来日しているので通訳を頼みたいという。依頼を引き受けて病院に行くと、大学の教員や学生をはじめ30人ぐらいの人が心配して集まっている。ただ集まっているだけでなく、家族のために宿泊先や移動手段の手配、携帯電話の手配、病院での付き添いなど、親身になって取り組んでいる。

授業の合間を利用した通訳は一月ほど続き、シリンさんは通訳として支援の輪に係わること、いつのまにか距離をおいてしまっていた日本の人たちの心情に触れる機会を得た。

通訳を機に、瀬口先生と出会い、留学生センターに出入りする日本人学生とも親しくなっていた。

シリンさんは、一年生のときから灘にある兵庫県国際交流協会の日本語講座に通い、こつこつと日本語のエッセイを書き溜めていた。「実はイランにいた頃からお話を書くのが大好きで、何か書いては母や姉に読んでもらっ



●2012年度入学式で記念講演

て、褒めてもらおうとそれが嬉しくて、また書いては読ませる。そんな子供でした」

何か書くと、誰かに読んでもらって感想を聞きたい。まだまだ拙い日本語のエッセイをおさるおさる瀬口先生に読んでもらった。すると先生は、面白いから学生にも読ませたいという。そのエッセイを読んだ留学生支援ボランティア「トラス」の中心メンバーの女子学生は、数日後にそれをストーリー仕立てのマンガにして持ってきてくれた。自分が主人公になったそのマンガはとても上手に描けていて、先生や学生たちに大受けとなり、予想もしなかった反響にシリンさんはとても勇気づけられたという。それからは日本語でどんな書いては、その学生に見てもらおうようになり、留学生文学賞に応募するまでに発展した。

●パナソニック社員としてドバイへ

大学院を修了したシリンさんは、いろんな「家電製品」で子供の頃から馴染み深かったパナソニックに就職することになった。3年間、京都にある事業所で訓練を積み、現在はドバイの現地法人で、SEとしてシステムの管理に携わっている。

ドバイでは日本のような残業は少なく、平日でも退社後に家で本を読んだり原稿を書いたりする余裕があり、イスラム圏の週末にあたる金曜と土曜には、カフェに出掛けて何時間も原稿を書いて過ごすことができる。

シリンさんの小説は、異なる文化の境界線上で揺らぐ不安定さが持ち味だ。日本を舞台に外国人通訳者の目を通して語る「サラム」や「拍動」では、作者も読者もそれぞれの立場で文化の狭間に揺さぶられる。イランを舞台に若者の初恋を描く「白い紙」では、目に浮かぶ映像を丁寧に淡々と日本語で書き取ることで、日本の読者を未体験の世界へと誘う。

「書く時間に余裕があるのはいいのですが、日本を離れている期間が長くなると、日本的な感覚が薄れていくのではと心配な面もあります」と、小説家としてのシリンさんはいふ。「ドバイは中東のハブ。ここにいるあいだに、その立地を生かした小説が書けたらいいなと思っています」

●グローバル時代の神戸大学へ

6年前に日本企業に就職し国内の事業所での勤務を経て海外に赴任したシリンさんは、「グローバル採用」の先駆けだ。

「就職してみても、日本の企業がグローバルな場で仕事ができる人材をいかに必要としているかを実感しました」とシリンさんはいふ。

日本企業はいま、生き残りをかけて徹底的なグローバル企業への転身を図っている。しかしそのための人材はまだ不足している。

「英語が上手に話せる人、グローバルな人材と誤解している人がいますが、重要なのは、固定観念にとらわれず、異なった文化的背景を持つ人たちと協同して課題を解決し、新しいものを創造していける能力です」とシリンさん。中学、高校を均質な環境で育ってきた日本の大多数の学生に自然に身につく素養ではない。文系・理系を問わず、学生の頃から身をもって異文化コミュニケーションを体験することが必要だ。

「多文化理解や国際交流関係の授業を必修化するのもひとつの方法かも」とシリンさんは、グローバル時代の神戸大学への道を提言する。



●3次元可視化システムを楽しむ

1 海外留学・研修への支援／幸野七海さんの場合

「フランス語の方言を体験する
ワールドワークのために、助成金を活用しています」

神戸大学基金（基盤事業）は次ページの表のように、さまざまな用途に活用されていますが、今回は、「在学生の国際化対応」に関連して、在学生の留学助成についてご紹介します。

国際化学部4回生の幸野七海さんは、フランスの国立第7大学（パリ・デイドロ大学）社会科学部言語学科に社会言語学（フランス語史）を学ぶために留学しました。そこで神戸大学基金の留学助成金を活用して、有意義な留学生活を送っています。今年の6月まで1年間の留学生活を送っている幸野さんに、留学助成の活用法やパリでの勉学の様子などを聞きました。

●「社会言語学」にあこがれて

幸野さんが留学しようと思った動機はどんなことだったのですか？

Q 私には将来「社会言語学者」になりたいという夢があって、そのためにフランス語史を勉強してみたいと思います。フランスへの留学を決めました。

Q 社会言語学というのは大まかに言ってどんな学問のですか？

A 言語学には構造に関する学問と使用に関する学問の二つの側面があります。社会言語学は使用の側面に着目して、文化や社会階層、地域特性などによって異なる言語コミュニケーション現象の実態を説明しようというものです。これによって、より良いコミュニケーションのあり方を導き出すことができます。

Q パリ・デイドロ大学に留学しようと思ったのはなぜですか？

A パリは非常に国際性に富んだ街で、いたるところに異文化の言語コミュニケーションがあふれています。異文化を経験することが留学の目的でもあり、また社会言語学の研究対象でもあります。パリ・デイドロ大学はちょうど都合がよかったです。神戸大学との留学協定校でもありますから。

●留学助成金の活用法

Q 留学の費用はだいたいどのくらいかかりますか？

A 大学の寮の家賃が約5万円、生活費が約5万円というところです。基金からの助成金は合計いくらで、どのように活用されていますか？

合計で40万円です。地方に出かけて行って、標準フランス語と方言との違いを体験するワールドワークのために活用しています。これまでアルザス地方、バスク地方、コートダジュール地方、ローヌ・アルプ地方、ワロン地方などに行きました。

●海外留学への心強い支援

Q 基金の留学助成制度は、神戸大学の国際化に役立つと思われませんか？

A 基金の留学助成制度は、神戸大学の国際化に役立つと思われませんか？

Q 基金の留学助成制度は、神戸大学の国際化に役立つと思われませんか？

A 基金の留学助成制度は、神戸大学の国際化に役立つと思われませんか？

Q 基金の留学助成制度は、神戸大学の国際化に役立つと思われませんか？

基金の留学助成制度は、神戸大学の国際化に役立つと思われませんか？



●ローヌ・アルプ地方に滞在した時（家主とともに）

Q 助成金が一番役に立ったのはどういう点ですか？

A パリはやはり物価が高いので、地方に出かける費用を捻出するのが大変です。その点で、ワールドワークのために助成金が大いに役立ちました。

●海外留学への心強い支援

Q 基金の留学助成制度は、神戸大学の国際化に役立つと思われませんか？

A 基金の留学助成制度は、神戸大学の国際化に役立つと思われませんか？

Q 基金の留学助成制度は、神戸大学の国際化に役立つと思われませんか？

基金の留学助成制度は、神戸大学の国際化に役立つと思われませんか？

基金の留学助成制度は、神戸大学の国際化に役立つと思われませんか？



●アルザス地方博物館にて

Q アルザス地方博物館にて



●留学時代の友人とともに

大谷一夫（おおたに・かずむ）2011年、大学院国際協力研究科博士前期課程修了（卒業生）。専門は、国際関係論。修士論文のテーマは「ロマ問題から見るコスモポリタン共同体としてのEUの限界」。大学院時代に1年間イギリスに留学した。写真左。

2 KALCS事業助成 ネイティブにしかできない 間違い訂正で、論文が大きくブラッシュアップされた。

Q ●英語プレゼンのチュートリアルを受講 大谷さんが受講した英語プレゼンテーションチュートリアルはどんな内容でしたか？

A 受講時期は、2011年11月から1月までの3ヶ月間。発表した論文は、「Investigating Europe as Borderland」でした。ネイティブの講師から1日1回90分の指導を受けるのですが、一対一で非常に丁寧かつ親切にご指導頂きました。留学していた経験から英語での論文作成にはある程度の自信があ

りましたが、自分の何気なく続けている間違った表現などを改めてご指摘いただき、修士論文における英語表現を大幅に改善することができました。

Q 受講してどんな感想を持たれましたか？

A 受講の効果として、「冠詞や細かい文法など、ネイティブでしか訂正できない部分を大きく修正でき、外国の方に見せても恥ずかしくない論文になったと自負しています。修士論文の口頭試問の際に、審査官から論文での英語の表現について褒めの言葉をいただきました。

Q 英語論文作成に自信ができましたか？

A はい。チュートリアルを受けてほんとはよかったと思います。非常に有意義な機会で、ありがたかったです。社会人になっても英語で書類作成をする機会が多いので、卒業生向けの機会があればいいなと思っています。

Q KALCSプログラムは神戸大学の国際化対応に役立っていると思いませんか？

A 大いに役立っていると思います。学生や外部の方への広報を広めながら、受講者のフィードバックを基に指導員の更改を行うなど、今後ともより良い方向に発展していくことを心から期待しております。

3 神戸大学基金の国際化対応プログラム概要

① 海外留学・研修への支援（2011年度実績）
神戸大学基金では、神戸大学の国際化対応力の向上を図るため、海外留学・研修・インターンシップ・ボランティア・国際学会などへの参加を支援する助成を実施している。2011年度の実績は左記の表のとおりである。

プログラム	対象	予算	実績
協定校への留学助成	学部3年次以上 大学院生 協定校への派遣決定者 語学力	月額上限4万円 (1人上限40万円)	23名助成
海外外国語研修への助成	主として学部1～2年次生 (3～4週間)	1人3～5万円	80名助成
部局企画プログラム	留学・研修・海外インターンシップ・ボランティアなど (2週間～3ヶ月)	1ヶ月未満：1人5万円 1ヶ月以上2ヶ月未満： 1人10万円 2ヶ月以上3ヶ月未満： 1人15万円	39名助成
国際学会等派遣事業	発表する大学院生	1人上限10万円	18名助成

② KALCS事業助成（2011年度実績）

KALCS (Kobe University Academic Language and Communication Support) は、神戸大学構成員の学術英語力の向上と国際化への対応力向上のために、国際コミュニケーションセンターが2010年度から実施している事業である。神戸大学基金では、国際化対応の一環としてこの事業への助成を実施している。2011年度の実績は左記の表のとおりである。

プログラム	対象	内容	実績
英語個人指導 チュートリアル	主として教員・大学院生	英語論文校正 口頭発表指導	延べ97名受講
英語プレゼンテーション セミナー (グループ指導)	主として学部学生	ネイティブスピーカーによる指導。 1クラス4～5名、 1回40分、週1回、 5週間で完結	延べ329名受講
英語プレゼンテーション コンテスト	全学向け	テーマを決めて英語で プレゼンテーションする コンテスト	23名予選参加
KALCS文庫	全学向け	英語による論文作成、 プレゼンテーション、 口頭発表などに関する 書籍の購入と貸出し	136名利用

ききん・だより

「東日本大震災への取組み」

神戸大学、 「第8次ボランティアバス」 を派遣

「神戸大学基金」（東日本大震災支援）に寄せられた皆さまからの厚意により、神戸大学では「第8次ボランティアバス」を、4月29日（日）から5月4日（金）まで、東日本大震災の被災地（岩手県沿岸部）へ派遣し、足湯ボランティアや仮設住宅でのコミュニケーション活動の支援を行うことができました。

この取組みは、平成7年に発生した阪神・淡路大震災で大きな被害を被った際に、大変多くの温かいご支援をいただいたことへの恩返しとして、また神戸という被災地に立地する大学の使命として、引き続き取り組んでいきたいと考えています。今後とも「神戸大学基金」



●第8次ボラバス：足湯をする

金」（東日本大震災支援）を通じて、支援活動にご協力賜りますようお願い申し上げます。

「基金の募金状況と展開内容」 国際化への対応をはじめ、 多彩な活動を支援

神戸大学基金（基盤事業）の展開内容は、以下のとおりです。

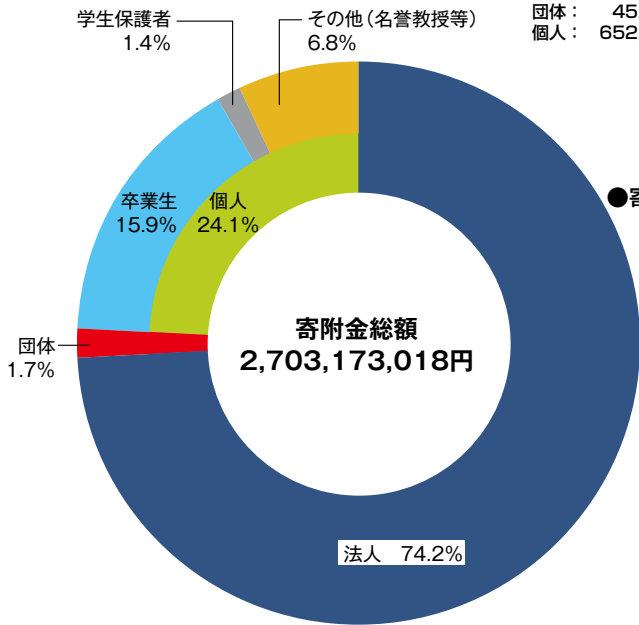
- ① 明確な目標を持った優秀な学生の海外留学・研修への派遣支援として
海外派遣・語学研修・留学・海外インターンシップ・ボランティア・国際学会等派遣事業
- ② 海外に向けた発信への支援として
研究者向け英語個人指導・学部生向け英語プレゼンテーション指導等
- ③ 海外からの優秀な留学生・研究者の受入として
ダブルディグリープログラムに参加する協定大学から来学してくる海外留学生への支援
- ④ 神戸大学基金奨学金制度の充実
神戸大学基金緊急奨学金（災害や不慮の出来事による修学・生活困窮学生への支援）
神戸大学基金奨学金（優秀かつ生活が困窮している新一年次生への支援）
- ⑤ 課外活動（ボランティア活動を含む）支援
ボランティアバス
学生団体又は学生の課外活動に対する支援
- ⑥ 東京地区におけるプレゼンス向上活動支援
神戸大学東京オフィスの整備等

また、本学は今年、神戸大学創立110周年を迎え、「世紀を超えて〜神戸大学110 years and beyond」をキャッチフレーズに、さらなる発展を目指し、現在展開

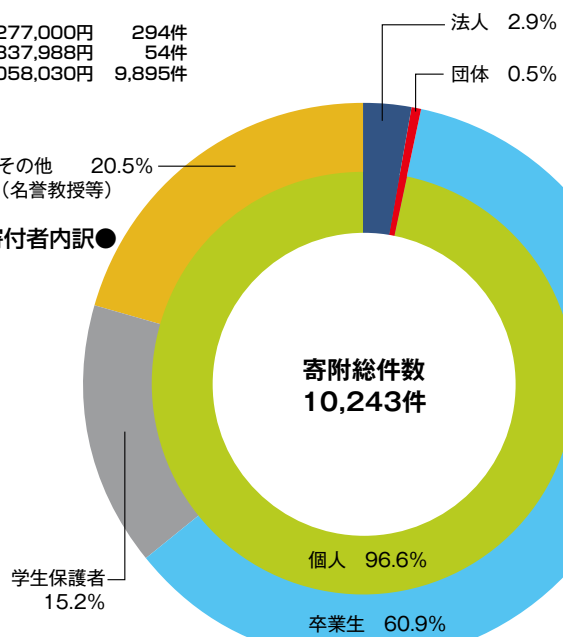
●図で見る神戸大学基金募金状況
(2012(H24)3.31 現在)

寄附金総額：2,703,173,018円
寄附総件数：10,243件

【内訳】
法人：2,005,277,000円 294件
団体：45,837,988円 54件
個人：652,058,030円 9,895件



●寄付者内訳●



■法人：2,005,277,000円
■団体：45,837,988円
■個人：652,058,030円
(個人内訳)
■卒業生：429,665,660円
■学生保護者：38,373,000円
■その他(学内教職員/名誉教授/卒業生保護者等)：184,019,370円

■法人：294件
■団体：54件
■個人：9,895件
(個人内訳)
■卒業生：6,244件
■学生保護者：1,553件
■その他(学内教職員/名誉教授/卒業生保護者等)：2,098件



●KALCS英語プレゼンコンテストの発表者

中の基盤事業の他に、新しい分野にも支援の輪を拡大したいと考えています。皆さまからの、ご理解とご支援をお願い申し上げます。

「創立100周年を迎えて」

よりいっそうの取組みの強化を目指します。

神戸大学は1902（明治35）年の創立以来、「真摯・自由・協同」の理念の下、教育研究活動を推進し、本年度100周年になります。

これを機に、今後、特に下記の領域で施策を強化推進してまいりますので、何卒、神戸大学基金にお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

○国際場裡で活躍できる神戸大学生の育成

○先端学術領域における世界トップクラスの研究およびその発信

○防災、減災研究教育の拠点としての社会貢献

○地域社会への貢献

○大学経営を支えるスタッフの育成

ご寄附いただく方法

「個人のみなさま」

平成22年分からは、所得税法上の特別優遇措置として、適用下限額が現行の5千円から2千円に引き下げられ、より一層ご寄附をしていただきやすい環境になりました。

また、平成23年1月1日以降のご寄附より、本学に寄附した翌年1月1日に神戸市にお住まいの方は、神戸市個人市民税の優遇措置を受けられることが可能となりました。

お名前・住所・電話番号を下記の基金推進室までお知らせください。折り返し、払込取扱票一式をお送りしますので、銀行または郵便局からお振込みください。

●クレジットカードによるご寄附

平成23年12月からクレジットカードによるご寄附が可能となりました。神戸大学のWebサイトから寄附受付画面にアクセスしていつでもご寄附いただけます。ご利用いただけるカードは、「VISA」「Master Card」です。詳しくは左記サイトへアクセスしてください。



http://
www.kobe-u.ac.jp/kobekin/general.htm

「法人のみなさま」

所定の寄附申込書に必要な事項をご記入の上、下記基金推進室まで郵送ください。折り

返し、振込依頼書をお送りします。寄附申込書は、基金推進室に法人名・住所・電話番号をお知らせいただければ送付します。あるいは左記のサイトから書式をダウンロードすることもできます。



http://
www.kobe-u.ac.jp/kobekin/corporation.htm

「神戸大学基金推進室」

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
TEL 078-8003-5414
FAX 078-8003-5024



E-Mail:
kikin@office.kobe-u.ac.jp

お知らせ

寄附者の皆さま、紙面に挟んである「神戸大学とわたし」読者アンケートに、貴重なご意見、ご感想など、一言メッセージをお寄せください。

「神戸大学とわたし」読者アンケートで、現在までに寄せられている一言メッセージ

「寄附の理由」

- 神戸大学の益々の発展と産業界への貢献
- 国費で学んだ者として、母校の発展に寄することは大切かつ重要であるから
- 自身の出来る範囲で少しでもお役に立てればと願っております。
- 卒業生として、せめてもの恩返しのため

である。大学・学生のますますの飛躍を期待している。



E-Mail:
kikin@office.kobe-u.ac.jp

発行のこぼ

神戸大学は、明治35年（1902年）の創立以来、開放的で国際性に富む固有の文化の下、「真摯・自由・協同」の精神を理念とし、社会に貢献する人間性豊かな指導的人材の育成と、普遍的価値を有する「知」の創造拠点としての世界的教育・研究機関たることを目指してきました。

● 今、20世紀都市文明からの転換が激しく迫られる中で、大学にはその創造力を発揮して新しい21世紀文明構築のさきがけとなることと求められています。「神戸大学ビジョン2015」は、その第一歩として、「世界トップクラスの教育・研究」「卓越した社会貢献・大学経営」の実現を目指しています。

● 「神戸大学基金」は、ビジョンの実現を加速するためのターボ装置です。ターボの力をより強力なものとするためには、神戸大学が社会により深く根を張り、そこからの支持と支援を拡大することが不可欠となっています。

● 本誌「神戸大学とわたし」Across the Boundariesは、神戸大学と社会の接点に取材し、「ビジョン」を先取りする取り組みを可視化すること、社会貢献の促進とビジョンの早期実現に資することを目的として発行されました。読者の皆様の忌憚のないご意見をお待ちしています。

2010年1月1日

※表紙題字下の「メタモルフオーゼ」は、生物学でいう「変態・変身」の意。本誌は神戸大学が21世紀に飛躍する様を追いかけます。

神戸大学とわたし

Across the Boundaries
通巻第7号 No.7
2012年5月31日発行

発行人 国立大学法人神戸大学
編集人 企画部社会連携課
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
TEL: 078-803-5414
FAX: 078-803-5024



E-Mail:
kikin@office.kobe-u.ac.jp

思い出の詰まった母校へ! **第7回** 2012年10月27日(土)
 記念式典: 出光佐三記念六甲台講堂
神戸大学ホームカミングデー

【予定しているイベント】

記念式典、第9回留学生ホームカミングデー、学部企画、神戸大学基金展開事業報告/展示、
 ホームカミングデー市、学生イベントなど。

卒業生のみなさま・名誉教授の先生方に、現役学生・教職員との交流を深めていただく機会として、
 今年も「ホームカミングデー」を開催します。

ゼミ・クラブ・サークル同窓会の同時開催もお待ちしています。みなさまお誘い合わせの上、お越しください。



振り返れば六甲の山並 ~あの頃の友に会いたい



since 1902
 For 110 years and beyond